☆帝国主義の侵略反革命、社会帝国主義の武装反革命を粉砕し、世界革命戦争—世界プロ独を組織する世界単一党を国際階級闘争の最前線に組織せよ！

1977年1
7月5日
第317号
編集発行人 高木一夫
一部 150円

烽火

NOROSHI

共産主義者同盟（全国委員会）
■ 大阪戦旗社　大阪市大淀区本庄東2丁目2の31 とみやビル15号　㊫(06) 371—3706
■ 東　京　新宿北郵便局　私書箱　2018号
■ 沖　縄　那覇東郵便局　私書箱　2016号

蜂起の準備かファシズムか

安保粉砕・朝鮮連帯・沖縄解放！空港完全粉砕へ！

全国の同志諸君！　たたかう労働者人民諸君！

三里塚開港阻止決戦を頂点に開始された激動は、日本階級闘争の攻防の水準を一新しつつある。三月と五月の二つの三里塚決戦の爆発に対して、ブルジョアジーどもがどのような態度をとったのかを思いおこそう。「内乱がはじまった。日本の民主主義体制は危機にさらされている。過激派を国民の総力で壊滅しなければならない」——これが「反動的な」、「進歩的な」すべてのブルジョア階級の構成員とその代理人たちの、掛け値なしの総意であった。彼らは焦燥感を深めている。敵日本帝国主義は、全世界的な帝国主義間抗争の不可逆的激化による経済的危機と、これによって一層促進される労働者人民の不満反抗の増大、慢性的政府危機をかかえこんでおり、三里塚の一大戦闘は、ぱっくりあいた帝国主義の傷口をさらにおし広げたからである。激痛のなかで彼らは、もはやこれまでどうりの支配ではやってゆけないことをいやおうなく自覚し、〃戦後的統治〃が徐々に彼らにとって桎梏になってきていること、これからの脱皮が急務であることに直面している。他方プロレタリアートの陣営では、生まれつつある〃蜂起とソビエトの萌芽〃をいかに成長発展させるのかが、今日的任務の要であることがはっきりした。敵にとっても味方にとっても問題の中心は、誰が勝利するのか、いかなる政府いかなる権力が樹立されるべきなのか、どのようにしてどのような準備によって、という、すなわち「政府権力問題」である。ことがますます鮮やかに浮上しつつある。これを分水嶺とした巨大な分解と流動が、敵と味方の双方の陣営から着々と、そしてダイナミックに開始されたのだ。これが激動の内実である。

危機を深めるブルジョアジーの側からも攻勢的に、この政府権力問題をめぐる上からの選択の強要が、労働者人民にむ

5.23狭山決戦と連帯し、空港粉砕を訴える三里塚婦人行動隊、長谷川たけさん（右側は石川氏の御両親）

7.17

ひめゆり・白銀決起三周年
全国総決起闘争
沖縄・大阪・東京

支持する会

かって放たれている。ふりかえれば同じような事態は戦後の歴史において数度経験されている。もっとも新しくは、六九～七〇年過程における ベトナム反戦闘争の大衆的昂揚と、安保粉砕・日帝打倒を中心的政治スローガンとした反帝闘争がもっとも戦闘的にたたかいぬかれた時期であった。この時、日本帝国主義は破防法の発動と機動隊の準軍隊化＝一日軍政の常態化をもって、危機を回避した。人民統治の形態は、従来のいわゆる「戦後民主主義」からこれを境として、警察・行政・軍隊など国家暴力装置の強化肥大化をもってする、官僚的警察的独裁支配へと移行した。しかしこの時ですらブルジョアジーは、五五年に確立された自民党単独によるブルジョア政府の形態には何ら変更を加えることなく、このもとで全社会的な動揺を集約し、問題を収拾した。だが今日、様相は異なっている。

七三年オイルショック、世界通貨体制の恒常的危機の到来、七五年ベトナム完全解放、戦後世界支配体制（ヤルタ＝ジュネーブ体制）の崩壊を歴史的画期として、各国帝国主義の存亡的危機の深まりとともに、各国ブルジョアジーは旧来の政府にかわる政府形態を必要とするようになった。彼らは自己の階級的危機を「国家と国民の危機」にすりかえ、超過利潤をもって育成した社会帝国主義潮流の巨大な存在を利用し、社帝との連合によるブルジョア独裁の延命の可能性を追求しはじめたのである。この「新たな政府」の宣伝は、さしあたっては社帝どもを主力にしておこなわれている。「資本主義の危機と荒廃は救うことができる。国民の生活苦と生活不安は、国民のもっとも多数の意見を反映する連合政府の樹立によって解消する。議会制民主主義を信頼して一票を投ぜよ。そうすれば諸君には自由・繁栄・平和が約束される」――すなわち、今日ますます形式だけのものとなり、形骸化してゆくブルジョア民主共和制にたいする人民の幻惑をかきたてながら、この背後でブルジョア独裁支配維持のための暴力支配を強化してゆくところに、この政府、この中間連合政府の第一の性格はある。そしてこの政府は、これまでの歴史上そうであったようにファシズムの過渡をなす政府である。

日本においてもまったく同様である。

帝国主義にまで成長した日本資本主義国家は、ブルジョア独裁の国家である。それはどのような統治の形態、政府の形態をとってたちあらわれようとブルジョア独裁の道具である。が、ブルジョアジーにとって、どのような統治形態で人民を支配するのかという問題は、決して偶然にまかせられてもよいような他人事ではありえない。ブルジョアジーは人民をブルジョア独裁の延命に協力させ、もってこれを支配するための最良の統治の形態を必死になって追い求め、つくりあげようとしてきた。米帝の圧倒的な軍事力量と一元的な世界支配のもとに形成されたヤルタ＝ジュネーブ体制と、その軍事的一環としての日米安保体制下に成立した、日本のいわゆる「戦後民主主義」は、日本ブルジョアジーにとってもっとも有利な人民支配の体制であった。ところが、ヤルタ＝ジュネーブ体制の崩壊と、帝国主義間強盗的抗争の歴史的激化は、もはや「平和憲法」を名目上の統合軸とした旧来の支配体制が、ブルジョアジー自身にとってくびきに転化したことをあかるみにした。彼らは、帝国主義戦争のための無制限の軍備増強、人民動員を可能ならしめ、これに対する国民的賛同と忠誠を可能にする支配体制を欲求しはじめている。ブルジョア民主共和制のもとで日本ブルジョアジーが戦争を遂行するためには、独自の政治的軍事的布陣の構築と、憲法全面改悪を中軸とした戦後支配体制全体の一大転換を不可避とするからである。われわれは、「交戦権なき戦争」＝現行憲法のもとでの侵略反革命と戦争準備に対してもっとも前衛的にたたかいつつ、日本帝国主義が自己の法制度的制約を完全にとりはらって、全面的なアジア朝鮮侵略反革命の戦争遂行をおこなう準備を、中間連合政府攻撃下で一歩一歩おしすすめていることにたいして、トコトンたたかいぬかねばならない。それは確実に、ファシズムの準備にたいするプロレタリアートの革命的政治闘争の内実であり、プロレタリアートが全人民をひきいて、武装蜂起に勝利するための準備の政治的内実である。

ファシズムの準備か、武装蜂起の準備か――中間連合政府攻撃下におけるプロレタリアート人民のたたかいの基軸と、今春期攻防の総括の基軸をこのように確立せんとする者のみが、今後の階級闘争の真の革命的領導者たりうる。「憲法の空洞化反対」を叫ぶ社帝は、戦後民主主義の再現と回帰を要求することによって、〃ファシズムの準備か、武装蜂起の準備か〃というプロレタリアートの革命的選択を鈍らせ、蜂起への進軍ではなく、ブルジョア独裁の延命（中間連合政府）の死の行軍へと人民を組織しようとしている。ブルジョアジーの代理人＝社帝とこの追随者たる右翼日和見主義者とのたたかいを一層強化し、階級の最深部からプロレタリアートの革命的政治的決起をつくり出し、七八年夏期革命的政治闘争の推進と創出に全力をかたむけなければならない。

国際主義で武装した壮大な安保闘争をたたかえ

七月ボン先進国首脳会議を前にして、帝国主義間抗争戦は新たな展開を示しはじめた。昨年来の帝国主義の世界経済危機打開の基調とされた「三つの機関車戦略」はすでに早々と姿を消した。「三つの機関車国」たる米・日・西独の間の対立は、公然たる亀裂に転化した。国際通貨基金委員会、経済協力開発機構閣僚会議などうちつづく一連の国際会談は、七月ボン会談の前哨戦となった。これらの席上では、米帝が日独に内需拡大をつきつけれ

ば、逆に西独は米のドル防衛の無策をなじるという泥仕合いが演じられ、それだけではない、ECブロックを背景に西独は「日本は経常収支の黒字を減らす努力をまったくしていない」とぶちあげ、もはや米・日・西独の「一致した協力による世界経済の牽引」など望みえようもないことが、帝国主義にとっても逃がれられない現実となったのである。

六月二一日、こうした帝国主義間通貨・通商戦争の激化の帰結として、東京市場で円はついに一ドル＝二一〇円を割るという最高値を記録した。ここには、はっきりとした特徴があらわれている。ただ円だけが高騰しつづけたという事実である。持続する円高にもかかわらず自動車・家電を中心に輸出増と貿易収支の大幅黒字をつづける日本への、米・EC諸帝の狙いうち的な包囲と圧力が、円高の連続的記録更新を噴出させているのである。基軸通貨を失った変動相場制のもとで深まる国際通貨危機こそ、帝国主義間戦争の今日的発顕形態であり、「持たざる国」日帝はこれによって、帝国主義のもっとも弱い環たる姿をあらわにせざるをえない。

国内需要の頭うちと不況の長期化のなかで、日本資本主義は合繊・化学・造船部門に顕著な、資本合併、系列再編、過剰生産手段の整理をおしすすめ、金融寡頭体制の強化をすすめつつも、危機打開の中心を輸出競争力の強化に置かざるをえないという絶望的なジレンマにおちいっている。輸出増＝貿易黒字こそ円高と対日批判の主要な原因なのである。原因をとり除くに原因をもってするという一見逆立ちした解決は、ただ「銃声のしない帝国主義戦争」の強化と新植民地主義的略奪の強化を意味する。プロレタリアートにとってそれは、帝国主義のための戦争と強奪への加担と動員の強制以外の何ものでもない。事実、円高不況の到来を境として、安価な労働力・土地、あるいは特恵関税を求めて、韓国・東南アジアへの中小資本も含めた資本輸出が、再び急増している。これらの地域ではすでに米帝を追い抜いて日帝が、経済的覇者の位置を確立している。新植民地主義支配の貫徹は必ず、政治的軍事的制圧と民族的抑圧を不可欠とするという帝国主義の本性を、われわれは忘れてはならない。賃金比較にして日本の1/4から1/5、製造業時間当賃金の比較でみれば1/8という、驚くべき低賃金の過酷な労働を強いられる南朝鮮労働者の頭上には、日帝とカイライ政権朴の暴力支配が重くのしかかっているという現実は、他のアジアの国々においても同様である。

しかしこの地、アジア朝鮮の地では、世界最強の民族解放・社会主義勢力の闘いが反日帝闘争を持続拡大させている。これに対し日帝ブルジョアジーは、「戦争でもなければ不況から脱出できない」の発言をひきあいに出すまでもなく、アジア朝鮮侵略反革命戦争なくして、自己の危機を打開できないことを、半ば公然と明らかにしているのだ。

在韓米地上軍撤兵計画を引き金にした日米安保の再編と強化は、このような切迫せる情勢の中で、日帝＝自衛隊の核武装をも含む朝鮮侵略反革命戦争のための即戦力、実戦部隊としての増強をともなって、急激に進行している。

第一に「安保新時代」「第三次安保改訂」をかかげた日帝の、日米安保体制に占める位置と役割りが飛躍的に増大していることである。七五年、坂田＝シュレジンジャー軍事会談を画期に、日米防衛協力小委が発足し、今日それは作戦・情報・後方支援の三部会を有す日米共同作戦司令部へと成長した。防衛小委設置に際し「防衛技術的には〃精神規定〃にとどまっていた日米安保条約が、はじめて具体的な運用可能な〃実規定〃となり、わが国防衛はさらに「朝雲」）と評価されたように、日帝にとって七五年以降の過程は、在日米軍と対等の軍事的地位へと自衛隊をおしあげてゆく過程であった。そして最近では「経済は日本がやるから防衛面はほかに頼むでは通用しない。国際社会の一員として防衛費の分担を求められるのは当然」（関西経済同友会）、「〃安保ただのり〃の不信感を一掃するために、日本の防衛費分担になんらかの工夫があってしかるべき」（経団連）などの露骨な世論工作発言をバックに、在日米軍駐留費負担増額など、米帝の圧力に屈するかの姿をとって、実は極めて攻勢的な日帝の側からする安保の再編がもくろまれているのだ。

第二に、防衛二法の改悪策動を頂点にして海外派兵、核武装、国内治安出動をめざして自衛隊を帝国主義軍隊として完成化することは、日帝の第一級の政治課題であり、防衛分担実行のかぎりで米帝もまた、これに同意せざるをえないのである。本年に入って政府官僚、防衛庁幹部などの反革命的発言を通じて日帝は、①「自衛隊は国連の平和維持軍に参加すべきである」（猪木）「難民救済の場合は自衛隊の海外派兵もありうる」（伊藤）と自衛隊法改悪にもとづいた海外派兵の野望を示し、②「憲法九条の限度の範囲内にとどまるものであるかぎり、核兵器を保有できる」（福田）と核武装の策謀を公然と語り、「原子力の平和利用」と銘うった原発建設・原子力船開発とともにこれを準備し、また、③地震対策特別法の審議にあたって、「全国規模の治安事件なら自衛隊の治安出動もありうる」（金丸）「防災出動が十分おこなわれ、その結果、治安出動の訓練になってどこが悪い」（福田）と、自衛隊の防災派遣に名をかりた内乱内戦鎮圧のための下準備を急ピッチですすめているのである。

第三に、明確に「第二次朝鮮戦争」を想定しての全面的再編の過程に、日米安保が突入したということである。とりわけ、侵略反革命前線基地の島、沖縄にたいする攻撃はすさまじさを極めている。本年に入ってからでさえ、三月の史上最大級の日米韓合同軍事演習「チーム・スピリット'78」の強行、北部における住民地域への戦車砲の「誤射」、五月のF4ファントム機の墜落、そして連日にわたる軍事演習など、「戦場の島」としての現実は、「二・二二ブラウン米国防長官発言」「五・一五合意メモ」とあわせて、朝鮮侵略反革命の出撃基地・軍事拠点としての沖縄基地強化を物語ってあまりある。うちつづく攻撃は、七五年六月の「北朝鮮が攻撃してくれば沖縄からのB52爆撃で九日間でセン滅する」という「九日間戦争計画」が実施段階に移されたことを意味するものである。この戦争策動の一方の主役である日帝＝自衛隊は、朝鮮直接出撃に備えて、F15導入、西部方面隊増強をすすめ、七六年六月二三日（沖縄戦終結日）の南部戦跡への自衛隊夜間行軍強行、七七年五月十八日公用地法（基地確保法）強行延長をはじめとした沖縄自衛隊の精神的軍事的強化をはかり、明治琉球処分以来の百年の差別と迫害の歴史のうえに、いま再び、沖縄人民を侵略反革命へと駆り出してゆこうとする暴力的攻撃を激化させているのである。

これらいっさいの日本帝国主義の策動のほこ先は、朝鮮とアジアの人民にむけられている。とりわけ南朝鮮において日帝は、米帝との争奪戦をとおして経済・政治の命脈を握り、いまや軍事的にも支配権を掌握せんとする段階にまで至っているのだ。日本国内で高まるブルジョアジーの兵器増産、武器輸出の声を背景として日本独占資本の、韓国軍需産業へのテコ入れと支配は急速である。経団連の河野文彦は「韓国内で日本の管理する兵器生産を韓国経済第四次五ケ年計画の骨子とし、その兵器を第三国が買いたいというならば売ればいい」と発言し、軍事的支配の水路を韓国軍需産業の完全掌握に求めるという日帝の、計画の一端を挑戦的にあきらかにしたのである。

この情況下でうちつづく南朝鮮人民の朴独裁政権にたいする不屈のたたかいは、その根底においてもっとも激烈な反日帝闘争である。六月十二日には、五月の決起をうけついでソウル大生千余名は「維新独裁の撤廃・緊急措置の解除」とともに、「昨日は民族経済を売り、今日は領土まで（日本に）ささげるのか」

と、日帝の独島（竹島）略奪とのたたかいを掲げ、四時間にわたる機動隊との戦闘をうちぬいた。日帝＝朴は、五月二七日在日韓国人母国留学生徐俊植（ソ・ジュンシク）氏への初の「社会安全法」適用に示される大弾圧を、南朝鮮人民の英雄的たたかいに浴びせているのだ。

たたかう労働者人民諸君。

帝国主義戦争を国内戦に転化せよというレーニン主義の教訓は、いまなお不滅である。われわれは壮大な、真に全人民的な朝鮮侵略反革命粉砕の安保闘争の爆発をもって、蜂起の諸条件の主体的政治的準備を着実にすすめ、自国帝国主義＝日帝打倒にむかう革命的政治闘争の創出にまい進せねばならない。今日、公明・民社を尖兵として、安保・自衛隊・天皇制の擁護・承認運動が大々的に開始され、また、釣魚台（テャオユイタイ）、独島（竹島）、日韓大陸棚をめぐる帝国主義の領土・領海・資源略奪のための排外主義扇動に、すべての議会内諸政党がこぞって唱和するという情勢の中で、国際主義的連帯の精神につらぬかれた革命的政治闘争の組織化は、きわめて重大、かつ緊要であるといわねばならない。

国際主義的任務と連帯のためのたたかいは、同時に、全世界のプロレタリアート人民の最高の団結を、世界単一党再建へと物質化せしめる事業であることをわれわれは忘れてはならない。日本の革命的プロレタリアートは、日帝の侵略反革命に対し、帝国主義足下の労働者階級の責務にかけてもっとも激しくたたかい抜くとともに、この世界史的任務を自己の双肩に荷わねばならないのである。とりわけ、民族解放・社会主義勢力の大後方の位置を確立しつづけてきた中国共産党への同志的批判と闘争は重要である。国際共産主義運動をめぐる最新の動向は、「三つの世界論」に統合される「ソ連社帝主敵論」「安保肯定論」などの中国共産党の党路線と国際政策が、まず、世界革命戦略上もっとも重要な位置をもつ帝国主義下革命運動の指導基軸をもちえず、帝国主義の侵略反革命と不断に闘争しつづけねばならない民族解放・社会主義勢力の社会主義建設を十分に防衛できず、また自ら総和革命＝一国社会主義建設路線的傾斜を深めることによって、世界の社会主義諸勢力の国際的団結を十分に指導しえず、総体としてソ連社帝の国際共産主義運動への反革命的介入と分断策動の余地を与えるという、弱点と誤りを明らかにしている。

一国における革命運動は、国際的な共産主義運動の前進に緊密に結びつけられねばならない。われわれは、日帝の侵略反革命を内戦に転化せよというロシア革命戦争―世界プロ独を組織するンを、〃世界革命戦争―世界革命単一党〃の創建の偉大な事業と、固く結合してとらえ、現下の国際階級闘争が要請する国際主義的任務の総体に、こたえてゆかねばならないのである。

開始された流動と活性化を
七月政治闘争の奔流へ

すべての同志・友人諸君！

いまこそ日本労働者階級の、前衛的指導的階級としてのたたかいの真価が問われている。労働者階級を真の指導階級に鍛えあげてゆくこと、その中核を「革命の軍隊」として建設してゆくことを抜きにして、すべては空語である。このたたかいの前進のためにこそ、われわれは、経済主義・組合主義と主観的にはたたかおうとしつつも、結局はこれとのたたかいから逃亡する左翼小児病的誤りと自己を分岐し、労働運動の広大な戦場を社会帝国主義・右翼日和見主義にあけわたすことなく、労働者階級の中から不抜の革命戦士たちを建設しなければならない。「ボリシェビズムは労働運動内部のどのような敵との闘争の中で成長し、強くなり、鍛えられたか？　第一に、そして主として日和見主義に対する闘争の中である」というレーニン主義の見地に立脚し、労働者の政治的革命的決起をはばみ、労働者の革命への前進と独自の権力の樹立に敵対する中間連合政府派＝社帝潮流とのたたかいにこれを物質化し、労働運動内部に武装蜂起―プロレタリア独裁の大道をしきつめねばならない。これが現代の共産主義者（党）と革命的プロレタリアートがひきうけるべき、革命的任務のもっとも重要な一つである。

「連合の時代」を基調とし、「資本主義の改良と救済」をかかげた社共・民同・同盟などが社帝主導下の七八春闘は、物価上昇率を下回る「賃上げ」（労働省ですら七年ぶりの低額回答であったと発表したような）をもって幕をとじた。七八春闘は、労働者人民への首切り、失業、生活不安の増大を阻止しえず、逆に全逓への集中弾圧・スト脱落や、全電通民同の「春闘方式の破産、三年に一回の賃闘」などの右からの敗北総括の噴出に見られるように、旧来の総評―公労協という闘争基盤さえ、国家権力によって浸蝕されるという事態を招いたのである。「労使関係はやっと正常化の第一歩を踏みだした」（経団連・土光）と春闘圧勝宣言をうちだしたブルジョアジーは、ただちに公労協最左派勢力をなす国鉄労働運動に、二万四千の訓告を含む大量処分を加えた。ひきつづき六月には公企体基本問題会議によって、国鉄・たばこ専売・国有林野・アルコール専売の公共企業体民営化構想が大宣伝され、スト権奪還闘争の骨抜きがもくろまれるなど、総評組織の最終的解体がきわめて攻勢的に画策されているのである。侵略反革命戦争への人民大動員にむかって日本帝国主義は、資本の支配の枠をいささかでもこえる運動と組織のいっさいを許さず、労働組合そのものを、侵略反革命戦争遂行体制の翼賛組織へと改造してゆく攻撃に身をのりだした。それは徐々に公然化しはじめた。「不況からの脱出」を合言葉としてくりひろげられる兵器国産化・兵器輸出解禁運動や、あるいは円高不況を理由とした資本の「海外進出」に、「会社が倒れれば食えなくなる」のをもって労働者を強制的に動員するという攻撃が激化し、これに造船重機労連、鉄鋼連幹部などを先頭に、組合をあげて協力するという事態が今日、進行している。これらは戦闘的労働者のパージ、職場支配の強化をともなって、労働運動・労働組合の産業報国会化攻撃の先がけをなしているのだ。

社共・民同もまたこれに屈服し、反撃すると見せかけて労働運動の議会主義的統合、すなわち中間連合政府の道へと労働者階級を、ひきずりこもうとするのである。西ドイツやイタリアなどの現実が示すように、中間連合政府は、労働者階級に資本主義の危機の救済を強要し、「賃上げ自粛」「スト抑制」を迫り、労働者階級のたたかいの一切合財を奪いさるのである。そしてこれは、はっきりと産業報国会への道を掃き清めるものにほかならない。

他方、社共制圧下の労働運動の内部から、巨大な労働者の政治的活性化流動化が同時進行しはじめている。もっとも先進的な部分は三里塚決戦を筆頭とした政治闘争に立ちあがりつづけ、帝国主義とその走狗どもを、震えあがらせている。これに対する権力・資本・当局と社共の弾圧は、既得権利の剝奪や職場管理支配の強化の反革命的徹底性ゆえに、いまだ政治的に目ざめてはいない労働者の層の膨大な不満と怒りをよびおこすという事態を生起させているのである。社共の反革命的純化は、必ずその対極に、自然発生的な労働者の戦闘的結束とたたかいを生み出さずにはおかないであろう。事実、その胎動は開始された。われわれは、帝国主義ブルジョアジーが企図する、戦闘的労働者へのレッド・パージ、合法的基盤の剝奪の攻撃とたたかいぬきながら、開始された活性と流動を絶好の条件としてとらえ、いまこそ、革命党と直結した武装せる革命の伝導路を、労働者大衆の奥深く建設しつづけねばならない。そしてこのたたかいは、社共はむろんのこと、「第四インター」を代表格とする右翼日和見主義との、本格的な組織戦をまったく不可欠にしてたたかい抜かれるであろう。彼らとの、政府権力問題をめぐる、ソビエト―統一戦線をめぐる、戦術原則と小戦術をめぐる、あらゆる原則的

であり実践的である諸問題をめぐって党派闘争を貫徹し、このたたかいを通して右翼日和見主義の悪しき政治的影響を根絶しなければならない。

四トロは春期総括として、「改良主義の時代から社会主義の時代への転換」を主張し、その結論を「労農人民の戦闘的大衆闘争を改良主義労働官僚から独立した全国潮流へ結合させる」としている。この短い引用からでさえ、彼らが自然発生性の右翼的賛美者であることは一目瞭然なのであるが、さらに、ことばの背後には秘密が隠れているのである。彼らの「社会主義」は、蜂起と蜂起の準備をまったく欠落させた「政権交代」であり、「改良主義労働官僚から独立…」などは、例の「社共は労農政府を樹立せよ！」の四トロテーゼをもって光をあてれば、社帝潮流の強大な存在をはじめから大前提としたうえでの、社共に容認された「左」派反対派形成以外を意味せず、それは決して、「独立した」プロレタリアートの独自の勢力ではなく、たかだか組合主義的反対派組織の連合体にすぎないのである。「右翼日和見主義との原則的党派闘争の貫徹」を主張する中核派は、にもかかわらず、「対日争闘戦の激化」からのみ日帝の危機を論じる一国主義ともあわせて、日和見主義との闘争においても、急進民主主義的弱点を全面開花させているのである。

同志・友人諸君！

開始された激動期、帝国主義の戦争策動と中間連合政府攻撃が一段と激しさを増すこの一時代を、ファシズムの準備とするのか、それとも社会主義革命を樹立する武装蜂起の準備とするのか――ひきつづき、工場・職場・学園・地域で、そして反動的な組合の内部で戦闘的労働者人民とともに、この革命的選択的基軸のもとに奮闘せねばならない。

七月闘争の革命的政治的任務を鮮明にしよう。

第一に、国際主義にみちびかれた安保闘争、朝鮮侵略反革命粉砕闘争の爆発をたたかいとることである。安保粉砕！朝鮮連帯！沖縄解放！をかかげ、日米安保体制＝自衛隊の飛躍的強化と対決せねばならない。きたる七・一七ひめゆり・白銀決起三周年闘争を、沖縄解放同盟とともに沖縄・関西・関東でうちぬき、壮大な新たな安保闘争の幕あけをかちとれ！

第二に、三里塚空港完全粉砕のたたかいである。反対同盟はペテン的「話し合い路線」を拒否し、断固として百日間戦闘宣言を発した。総力でこれにこたえ、二期工区着工策動を粉砕し、連続的決戦の爆発をもって、蜂起の序幕戦をきりひらけ！

第三に、緊迫化する狭山再審闘争の勝利にむけた進撃をかちとるたたかいである。高裁＝四谷・山本の再審早期却下策動を粉砕して、強化される融和主義攻撃のもとで、部落解放闘争の革命的発展をかちとらねばならない。再審勝利！石川奪還！へ。

同志・友人諸君！

これらのたたかいのいっさいは、わが革命党＝中央集権非合法党建設の前進にかかっている。敵権力の組織破防法攻撃から党組織と党事業、すべての先進的たたかいを防衛し、党の非合法武装をおしすすめ、このたたかいの圧倒的前進をもって七月闘争に勝利せよ！ともにたたかわん！

7・5 公判闘争に結集せよ

反革命加納一派完全打倒闘争・控訴審判決公判に結集せよ

四・一二判決公判直前に仕組まれた国家権力の意をうけた新たなデッチ上げの陰謀は、我々の闘いによって完全に打ち砕かれた。

この陰謀は、「犯人たちは警官が到着するまで頭部を乱打していた。あとすこし警官の到着が遅れていたら四名とも死んでいたでしょう」という久松友子調書に依拠した、一審の殺人罪認定の事実認定が、完全に粉砕されていく中でおこなわれたものである。

このデッチ上げは、二審において、ウノ沢（警官）が階段の下付近で男が倒れているのをみたと証言したことを再度くつがえすことを目的としておこなわれた。そのために、現場に最初に到着したのは、ウノ沢ではなく、福永という警官であり、久松友子に事情聴取をおこなった際、加納一派の小西らしき男が、久松宅で倒れていたと四月十二日公判において福永に証言させたのである。

だが、このデッチ上げはあまりにもズサンである。第一に現場に警官が、最初に到着した時間は他の警官の証言により一時十一～二分頃であること、第二に、警官が、可能性も充分にある。そもそも、久松友子に接触して「犯人」の人二階に小西らしき男がいたという着が、無線で流されたのは、一時福永の証言は、ただ髪の毛が長い、二〇分頃だからである。

福永は、わざと現場到着時間は「記憶にありません」と偽証した上で、久松宅到着後の行動として、「最初に久松友子に事情聴取して犯人の人着を特定し無線で流した。その間二～三分間である。その後、久松宅の二階で小西らしき男が倒れているのを発見した」と証言しているのだ。

この事実だけで、福永が、最初に現場に到着したのでないことは鮮明である。福永は、無線で人着が流される二～三分前に加納宅に到着したのである。厳密には、一時十七～八分頃であり、ウノ沢が現場に到着してから五～六分後なのである。以上の事により、二階で、小西らしき男をみたという福永の証言もまたいいかげんなものになる。小西は、五分間の間に加納一派によって屋内に運びこまれた可能性も、自分で歩いていった可能性も充分にある。そもそも、

だが我々は、革命党破壊攻撃の中軸たる、長期投獄・肉体抹殺攻撃をいかに権力がもくろもうとも、中央集権非合法党建設の勝利を阻止することはできないことを確信する。三年前、激動の一時代にそなえるべく本格的な中央集権非合法党の建設が開始された時、権力よりおくりこまれた、現代カウツキー主義、反革命加納一派との死命を決する党建設の闘いに敢然と決起した三戦士は、獄中闘争において、権力のかかる野望を打ち砕く闘いを展開した。三戦士は、獄中という困難な中で、党建設と固く結合し、獄中生活を党建設のための戦場へと転化し、我々の中央集権非合法党建設を前進させた。七・五判決公判にこの三戦士とともに決起せよ！

映するし、七・五判決公判も楽観視しえない。

警官の証言は屋内に運びこまれた可能性も、自分で歩いていった可能性も充分にある。そもそも、

いずれにしろ、検事は、我々の「警官が来た時、すでに我々は帰路にあった。したがって小西は庭の真中あたりに倒れていたか、うずくまっていたはずである」という殺人罪適用を打ち砕く主張をくつがえすことはできなかった。だが、検事のこの失策の中にも、日帝国家権力の革命党破壊にこめた、野望をみなければならない。法廷での勝利が権力に弾圧の口実を与えないという条件をつくりだすにせよ三戦士の無罪を保障するものではないことを肝に銘ぜねばならない。いかなる意味でも裁判とは、真理の審査の場ではなく、ブルジョアジーの利害の貫徹の場である。したがって階級闘争の力関係が反

日本階級闘争の新たな地平きりひらく

5・20 決戦の戦果うけついで 百日間闘争にたちあがれ！ 三里塚

五・二〇三里塚開港阻止決戦は、三里塚空港完全粉砕に向けた新たな進撃の烽火を鮮烈に打ちたてた。闘いはいよいよこれからだ！　日帝の中間連合政府攻撃の下で進行するファシズムの準備と対決し、日本における武装蜂起の序幕を切り拓くべく引き続く決戦に総進撃しようではないか！

五・二〇出直し開港粉砕全国総決起闘争は、三里塚第一公園に、全国の闘う人民二万二千を総結集し、三・二六以降の権力の「話し合い路線」と成田治安立法を中心にした大治安弾圧を打ち破り、引き続き日本階級闘争の最先端を切り拓く三里塚闘争の偉大な隊伍を全人民の前に明らかにした。

反対同盟を代表してあいさつに立った戸村委員長は、「成田特別治安立法なにするものぞ。われわれの闘いあるところ、いかなる権力の弾圧もこれをはばむことはできない」と不屈の決意を明らかにする。続いて獄中から奪還された北原事務局長、石井武実行役員があいさつに立ち、闘志あふれる戦列復帰宣言を行なった。

動労千葉、部落解放同盟、高浜入干拓反対同盟、日本原、そして全国の反基地、住民闘争を闘う諸団体の代表が続々と壇上に立つ。敷地内同盟から石橋副委員長、島村良助氏があいさつに立ち、二期工区決戦に向けた決意を述べる。最後に五・二〇集会宣言が高らかに読み上げられた。「農民の血と汗の叫びを無視し、面子にとらわれた空港の今日は、人民の包囲の中で苦渋に満ちたものとなるであろう。三里塚芝山連合空港反対同盟は、労働者、学生、農民の英知を集め、創意ある闘いによって、かならず廃港に追い込む決意であり、全国の皆さんの決起を訴えるものであります。」（五・二〇宣言）――まさに、これからの空港完全粉砕に向けた揺るぎない確信に満ち、全国の闘う全人民に総決起の檄が発せられたのだ。この宣言を受け、空港を包囲する大デモが貫行された。

この五・二〇闘争の大爆発の前に、日帝はわずか五十三名、福田の出席をも見合わさざるをえないという惨めな「開港式典」を余儀なくされた。また、全国から動員された一万三千の機動隊局長のあいさつは、今日の再審をめぐる情勢が極めて厳しいこと、再審請求却下攻撃との対決が極めて切迫した課題であることを全参加者の胸に再び刻みこんだ。

全障連の代表から「赤堀さんの命と石川さんの命はつながっている。二人を必ず生きて取り戻そう」と赤堀闘争

5.23 再審闘争に三万 狭山決戦

五月二十三日、東京代々木公園において、「五・二三石川一雄氏不当逮捕十五周年糾弾！狭山再審要求中央総決起集会」が全国から三万余の闘う人民を結集し、圧倒的にかちとられた。上杉書記長の基調報告、中山弁護団事務局長のあいさつは、今日の再審をめぐる

全ての諸君！　反対同盟は、六月一日、百日間戦闘宣言を発し、全国の闘う人民に空港完全粉砕に向けた総決起を要請した。この檄に応え、七・二現地大闘争に総決起せよ！

5.20「出直し開港」に一大打撃！（三里塚第一公園）

5.6月 三里塚・狭山・安保の爆発で

6.15～23 国際主義の旗高く 安保闘争貫徹

連帯のあいさつの最後に立った三里塚反対同盟長谷川たけ婦人行動隊長は「石川さんの闘いと三里塚はひとつ。必ず廃港に追いこむ」と勝利の確信に満ちたアピールを行う。そして集会の最後に獄中の石川一雄氏からの鮮烈なメッセージが読み上げられた。「私自身の生命を六千部落三百万兄弟の生命とし、八〇年代へ向う部落解放闘争の戦士として自己をうちきたえ闘う。狭山闘争の新たな歴史的本格的大爆発をもって国家権力を恐怖におののかせる以外に勝利の道はない」三万の結集した部落大衆、労働者人民は、この石川氏の檄を全身全霊をもって受けとめ、青山と渋谷の二コースにわかれて、都心を揺るがす、大デモンストレーションを打ち抜いたのである。

我が反帝戦線（全国委）は、三里塚五・二〇決戦の勝利の地平にしっかりと立ち、排外主義―融和主義を粉砕し、部落解放闘争の前進を武装蜂起―プロ独の大道へと領導すべく最先頭で闘い切った。全ての労働者人民諸君。狭山再審闘争をめぐる情勢は極めて緊迫している。日帝―東京高裁四谷は、今夏早期上告棄却を虎視たんたんと狙っている。他方、部落解放闘争を、「人権擁護」をかかげたブルジョア改良主義の沼地へ導き、帝国主義の危機の激成の中で耐えがたい貧困と部落差別の強化に憤激する部落大衆の決起を、ブルジョア独裁内の政権交代の要求＝中間連合政府へと引きこまんとする排外主義―融和主義の攻撃が一層進行している。したがって我々は、八・九上告棄却一年を迎え、今こそ、日帝の再審棄却攻撃との対決に全ての闘う人民の総結集を実現すると共に、その烈火の中で、「中間連合政府の下でのファシズムの準備か、蜂起の準備か」――この革命的分岐を更に鮮明にし蜂起―プロ独を実現する先進的部落大衆との固い団結を形成するという一個二重の闘いに何としても勝利せねばならない。

「目前の八・九の上告棄却という悪虐非道なこの暴挙は、その背景をなす司法権力、行政権力の部落三百万兄弟と共に高揚する反差別人民戦線に全体重をかけたものであり……あの日以来、歴史的勝利への真に大道は一切の反動と逆流を打ち破り、階級的実力闘争を基軸に据えた闘いのみに狭山勝利への途が切り開ける」という五・二三石川氏アピールにこたえ、八・九上告棄却一周年弾劾・石川氏奪還闘争の大爆発へ！

六・一五～六・二三安保・沖縄闘争を全国を貫く連続決起として闘い抜いた報告を送る。

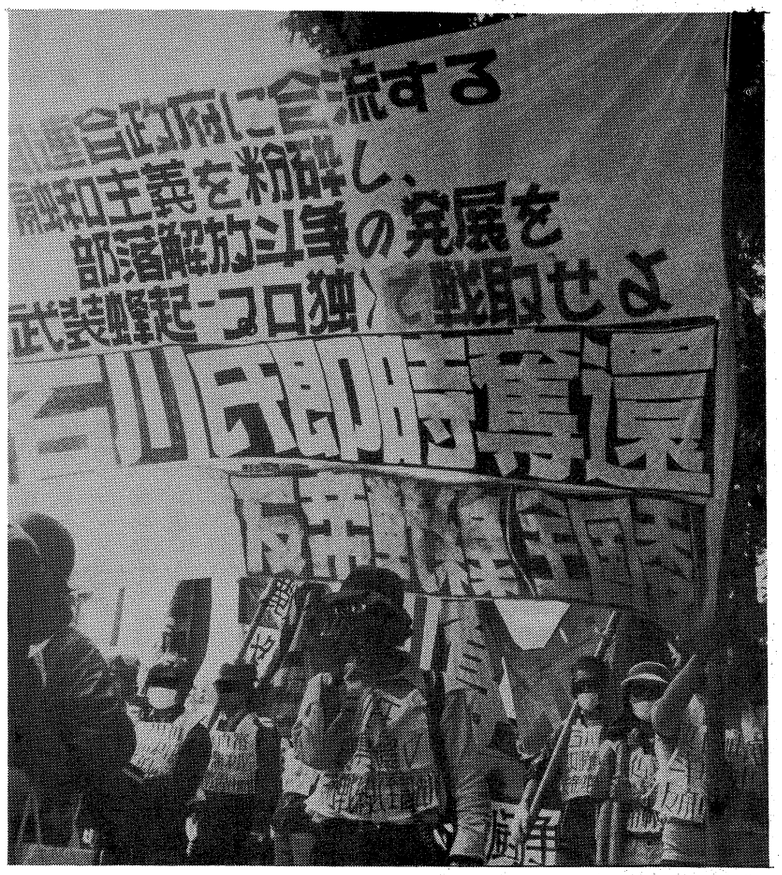
全ての労働者人民諸君！帝国主義の危機の激成と今春蜂起とソヴィエトの萌芽を生みだした三里塚闘争を頂点とした日本階級闘争の大爆発は、日帝をして最大の延命環＝朝鮮侵略反革命戦争へ激しく駆りたてている。

戦後最大の米日韓合同軍事演習（チームスピリット'78）の強行に示される「安保新時代」と称される日米安保の侵略的再編、「第二の三矢作戦計画」作製への公然たる着手、反革命防衛論議の組織化等攻撃はとどまる所を知らない。日帝の朝鮮侵略反革命を内戦へ――この国際主義のスローガンが、いよいよ闘う人民の決起の基礎に鮮明にかかげられねばならないのだ。

六・一五関西決起集会は、切迫する朝鮮侵略反革命戦争準備と対決せよ！という司会のあいさつで始まった。堺養護学校障害者差別糾弾闘争を闘う片平敏昭氏のアピール、七・一七皇太子沖縄上陸阻止ひめゆり―白銀闘争を支持する会（関西）からのアピールが読みあげられる。基調提起をうけ、三里塚・沖縄の同志からのあいさつ、電通労政からの「三里塚レッドパージ攻撃と対決し、社帝制圧下の労働運動の産業報国会化を粉砕し、日帝の朝鮮侵略反革命を内戦に転化する国際主義の最先頭を担う」という決意表明が熱烈に行なわれる。

そして今春三里塚闘争の激闘の中から結成された三里塚闘争勝利！S大実行委の若き戦士の決意表明は、とりわけ大きな拍手で確認された。洛北戦線の決意表明のあと最後に反帝戦線（全国委）の同志は、切迫する朝鮮侵略反革命戦争との対決を訴えたあと、闘いの核心を次のように提起した。

「もはや政策阻止闘争主義的安保闘争は無力である。日帝の側から権力問題をめぐる選択が労働者人民に突きつけられている。中間連合政府攻撃の一段と激しさを増す一時代をファシズムへの歴史的過渡



部落解放同盟とともに進撃！（5・23狭山）

期とするのか、武装蜂起―プロ独の準備期とするのか。この分水領にしっかりと立脚し、蜂起―内戦を切り拓く壮大な安保―沖縄闘争を創出せよ！」と。六・一七大阪電通労働者討論集会は、この関西集会を受け、三里塚レッド・パージとの対決をかかげて闘い抜かれた。

六・二三全関西総決起集会は、豪雨の中、京都三条河原に、全関西の闘う労働者・人民を総結集し打ち抜かれた。蜂起―内戦を切り拓く壮大な安保―沖縄闘争を創出せよ！――既に闘いの基軸は、六・一五闘争をもって鮮明にされている。再びしっかりとそれを確認し、とりわけ、七・二三里塚現地闘争三周年安保・沖縄闘争への総決起を固く誓い、圧倒的なデモに進撃する。四条河原町で円山で、機動隊をぐいぐい押しまくり、戦闘的デモを終始打ち抜いたのであ

全ての労働者人民諸君！　六〇年、七〇年を乗り越える安保闘争は、武装蜂起の準備の上にしっかりと立脚しなければならない。フアシズムの準備と対決し、国際主義の旗を更に高くかかげ、共に闘い抜こうではないか！

六月安保闘争の全成果をかけて七・一七全国総決起闘争の圧倒的成功をかちとろう！

赤琉
反帝戦線(全国委)
沖縄地方委機関紙
那覇東郵便局
私書箱2016号
赤琉社

労働運動の深部に武装せる革命の伝導路を構築せよ！

――われわれの労働運動基調（中）

第二章　レーニン主義の継承―「左」右の日和見主義との闘争

第一章で述べたごとく、我々は、共産同党建設の闘いを通して、「労研・社研路線」―「階級的労働運動」を、我々の労働運動指導の前史とし、その総括を三〇一号路線下の労働運動基調として明らかにせんとしている。

その具体的提起を第三章で鮮明とするにあたって、我々は、レーニン・ボルシェヴィキ党のロシア革命指導の中では、共産主義者（党）の労働運動指導は、如何なる見地で、如何になされたかをはっきりとさせたい。なぜなら、我々は、労働（組合）運動の指導から自己の任務を展望するのではなく、プロの武装蜂起―プロ独を組織する、革命党からする労働運動指導として、徹頭徹尾レーニン主義の見地で武装せねばならないからである。かつ、今日においても、レーニンの時代における共産主義運動、党建設の闘いの阻害物、敵対者たる経済主義者、組合主義者および、主観的にはこれと闘おうとしつつも、結局は、これとの闘いから逃亡する〝左翼小児病者〟が、形を変え、姿を変え生きのびており、それら、党建設における日和見主義者、大衆運動の自然発生性への「左」右の拝跪主義者との断固たる闘いは、それらの者たちを我が同盟内に有していた過去の路線的克服という、我々自身の総括も含めて、ひき続き、厳格に組織せねばならないからである。旧来、党建設における「左」右の日和見主義者たちは、首尾一貫した共産主義運動の指導者だったレーニンの主張を歪曲し、右翼日和見主義者は『左小病』の改作悪用をもって革命的翼を非難し、自らの経済主義、組合主義を隠蔽せんとしてきたし、他方、左小病的部分は、『何をなすべきか』に立脚することをおろそかにし、労働運動の広大な戦場を、社会帝国主義者、右翼日和見主義者のほしいままに明けわたしてきた。我々は、『何をなすべきか』および『左翼小児病』の統合的把握をもって、レーニン主義労働運動を共産主義者（党）の目的意識的な労働運動指導として、組織しぬかねばならない。その現在的、具体的基調は、第三章において明らかにするが、ここでは、党建設の「左」右の日和見主義者たちと、レーニン・ボルシェヴィキの見地の分岐をはっきりさせ、我々こそが、レーニン主義労働運動の継承者であり、現在までの国際共産主義運動とその下での労働運動の勝利と敗北をレーニン主義的に総括することをもって、日本階級闘争を、蜂起―プロ独の大道へ導くことのできるマルクス・レーニン主義党へと自己を打ちきたえねばならないのである。

1　『何をなすべきか』におけるレーニンの原則的見地

☆

「何をなすべきか」は、先ずもって、経済主義、組合主義との、そして、急進主義との徹底した峻別を、政治的、組織的にかちとること、かつ、それを、階級闘争をプロレタリア社会主義革命の勝利へ導く革命党の建設の礎とすることを呼びかけている。

今日における党建設の「左」右の日和見主義者の手前勝手な解釈と異なり、レーニンは、『何をなすべきか』において、経済主義者との闘争だけを提起したのではなく、「経済主義者と（当時の）テロリストとの共通の一つの根としての」「自然発生性への拝跪」（何をなすべきか）、これとの闘争、これを路線化する者たちとの峻別を提起したのである。

そして、組織上の結論として、かかる自然発生性への「左」右の拝跪主義者、党建設の日和見主義者と明確に分岐した革命党組織として、「単一の全国的な革命家の組織―中央集権非合法党―武装蜂起を準備し、指定し、実行するに至るまでの、あらゆる事態に対して用意をもった組織」の建設を呼びかけ、実現せんとしたのである。

『何をなすべきか』は次のような時代を背景として、一九〇二年に提起された。一九世紀の最後の一〇年間に、ロシアの産業とプロレタリアートは急速度に発展、増大した。だが、当時ロシアの労働者は、ロシア資本主義の勃興期におかれており、労働者を保護する法律もなく、組合も禁止されており、資本家はほしいままに賃金を切り下げ、罰金を課し、労働時間を延長していた。そのような中で、一八九六年と九七年の二回にわたり、ペテルブルグの労働者は、一日十四～十五時間を越えていた労働時間の短縮を要求してストライキを行なったが、そのようにして労働者の側にひとたび戦闘的な気運が生じれば、それはたちまち野火のごとく広がっていった。そして、どこの国においてもそうであるように、ロシアにおいても、労働者の大衆運動の成長はブルジョアジーをして恐怖せしめ、日和見主義者の育成を支配のための死活問題とならしめた。すなわち、経済主義の発生であり、経済主義者たちは、当時の勃興期のロシアの全労働運動に強力な影響をおよぼしていった。

レーニンは、いまだマルクス主義陣営自身が組織的には誕生期にある時に、それを強力な階級闘争の、プロレタリア革命勝利への指導組織とするためにこそ、経済主義者への容赦ない集中攻撃、徹底批判を展開し、彼らとの峻別をまずもって革命党建設の基礎にすえたのである。

マルクス主義陣営から生まれた当時の経済主義者の文書『クレード』は、「社会主義者は、政治闘争をブルジョアジーにまかせ、労働者階級の経済的利益を確保することに専念すべきである」と主張。また、あるがままの労働者階級がそのままで革命的な階級であるとし、それゆえ、党の任務を、労働運動の拡大を〃援助〃することにおいた。それに対し、レーニンは、労働者階級は、共産主義党と結合してはじめて革命的階級となるのであり、党は労働運動を〃援助〃するのではなく、〃指導〃するのだとして、『何をなすべきか』において、次のようにその根拠を明らかにした。―「労働者階級は、まったくの独力では、組合主義的意識、すなわち、組合に団結し、雇主と闘争を行ない、政府から労働者に必要なあれこれの法律の発布をかちとることが必要だという確信をつくりあげうるだけである」そして、社会主義的意識は、労働者の自然発生的な闘いの外部からのみ―共産主義者の党によってのみ―もたらしうること。すなわち、「自然発生的な労働運動とは組合主義であり、組合主義者の思想的奴隷化を意味する」こと、「労働運動の自然発生的な発展は、運動をブルジョアイデオロギーに従属させる方向にすすむ」こと、それゆえに、共産主義者の任務は、自然発生性と闘争すること、ブルジョアジーの庇護のもとにはいろうとする組合主義のこの自然発生的な志向から労働運動をひきはなして、共産主義の庇護のもとにひきいれることである。また、そうするためにこそ、共産主義者は、「改良のための闘争を、つねにその活動に含めてきたし、今でも含めている」のである。だが、共産主義者は、「改良のための闘争を、全体に対する部分として」社会主義のための闘争に従属させることを忘れてはならないのである。――このように概括すれば、『左小病』におけるレーニンの見地はすでに、『何をなすべきか』において基本的に貫かれていることが明白である。

ちなみに、ロシアにおいて労働組合は、合法的には存在せず、あらゆる労働運動はことごとく弾圧されていたが、国家が認可した唯一の労働組合として、警察の認可と監視を受ける「愛国的組織」であるズバトフ労働組合があった。これは「煽動者の武装を解除するために労働者の難問を合法的に解決する道を開き、彼等を指導する必要がある」（一八九八年ペテルブルグ警察長官トレポフ）との支配目的をもって警察によって組織されたものである。この（ズバトフ式労働）運動に対して、社会民主党内の多数は専ら非難と暴露をもって闘うにとどまり、「この運動の正体が暴露されれば、階級意識ある労働者は、これに関係しないだろう」と主張したが、レーニンだけは、恐れずこのズバトフ式組合内でも共産主義者は活動すべきことを主張した。

なぜなら、たとえ非合法な、政治警察との死闘を不可避とする当時の労働組合運動と言えども、その直接延長上にプロレタリアートの革命闘争は存在し得ないことを、したがって、プロレタリアートの党の任務を労働組合の指導のワク内から論じる傾向と党は闘わねばならないこと。ズバトフ式労働組合内での共産主義者の任務を否定する者こそ、結局は、組合の援助・助力に党の任務を溶解させるものであることを知っていたからである。

レーニン主義者は、右翼日和見主義と帝国主義の双方と死闘する。だから、労働運動の帝国主義的改組――産業報国会化策動・帝国主義の労働手代の組合支配のどのような現われとも革命的プロレタリアートは非妥協に闘わねばならない。そしてだからこそ、レーニン主義者は、今日の、ズバトフ式労働組合内でも、この闘いを組織しなければならないのだ。

2

『左翼小児病』における レーニンの原則的見地

☆

レーニンは一九二〇年、短期的な世界革命の見通しがあやうくなったこと（ハンガリー、ドイツ等欧州での反革命のいったんの勝利 e.t.c.）を背景に、〃蜂起に至るまでのあらゆる事態に対して用意をもった組織の建設〃を『左小病』を著わして提起した。これは、「反動的な労働組合から脱退せよ！」等のスローガンを掲げたドイツ等の「左翼」共産主義者を批判するという形で、当時の世界の共産主義者（党）にレーニン主義武装蜂起路線を呼びかけたものである。

一九一八年ドイツにおいて帝政が打倒され、共和国が樹立されてから一九二三年に至るまで、ドイツの労働運動はきわめて激しい闘争を展開し、とりわけ一九二〇年六月に至るまで革命的な情勢をもたらしていた。一九一八年から二〇年にかけて、それまで未組織であった労働者階級の広範な層が革命的な高まりを通じて自由労働組合に結集し、二〇～二一年には八〇〇万に近い組合員が組織された。その過程で、ドイツ労働組合内で革命的傾向が強まった結果、階級協調に反対する先進的プロレタリアートは、改良主義労働組合指導部（―ブルジョアジーの労働手代たる労組官僚）により大量に迫害され、労働組合から除名されていった。このような労組官僚の闘争圧殺、弾圧は多くの先進的労働者のあいだに非常な憤激をひき起した。このため、彼等のあいだには労働組合を十把ひとからげにその指導部と同一視し、労働組合内のいかなる活動をも拒否する者があらわれた。そして、この気運は若いドイツ共産党（一九一八年十二月創立）内の反マルクス・レーニン主義の一揆主義、暴動主義者により強められた。そのことは一九一八年のドイツ共産党創立大会において、ローザやリープクネヒトの勧告にそむいて、共産党員は自由労働組合内で活動をしないことが決議されたことに顕著である。レーニンはこのような「左翼」小児病をきびしく批判し、反動的な労働組合指導者・労働手代と労働組合に組織された大衆を同一視することの犯罪的誤まりを指摘し、労働者大衆を共産主義の側に獲得するためにこそ、労働組合内にとどまり、右翼日和見主義、経済主義者の正体を暴露し、労働組合から追放せねばならないのだとして、次のように主張したのである。

「資本主義の発展の初期に、労働組合は、労働者がその分散した孤立無援の状態から階級的団結にうつるきっかけとして、労働者階級の巨大な進歩を示すものであった。プロレタリアートがもつ階級的団結の最高形態つま

りプロレタリアートの革命的な党が成長しはじめた時、労組はどうしてもある種の反動的性格、ある種の同業組合的な狭さ、ある種の政治的中立主義への傾向、ある種の沈滞等々をあらわしはじめた。だが、労働組合を通じる以外に、労働組合と労働者階級の党との相互作用を通じる以外に世界中のどこにもプロレタリアートの発達は起らなかったし、起ることもできなかった」「この労働組合のある種の『反動性』を恐れ、それをとびこえようと試みることは愚の骨頂である。それはプロレタリアートの前衛の役割つまり、労働者階級と農民の最も遅れた層と大衆とを教育、啓蒙、訓練し、新しい生活へひっぱってゆくという役割を恐れることを意味するから」であり、換言すれば「反動的労働組合のなかで活動しないことは、発達の十分でない遅れた労働者大衆を反動的指導者たち、ブルジョアジーの手先ども、労働貴族たちの影響のもとにとり残すこと」だからであり、それゆえに、我々は「たとえ最も反動的なものであろうとプロレタリア的大衆あるいは半プロレタリア的大衆さえいるなら」かつ、その中でどんなことであろうと共産主義的な活動をする事ができさえするなら「その機関、団体、組合内であらゆる犠牲に耐えぬき、最大の障害にもうちかち、系統的に頑強にねばり強く、しんぼう強く宣伝、煽動を実行せねばならず」「日和見主義的な、社会排外主義的な指導者との闘争を労働者階級を自分の側にひきよせるために行なわねばならない。」（「共産主義における『左翼』小児病」）のである。

我々はそのようにして、労働（組合）運動を指導し、その闘争の全ての経験、教訓を革命的プロレタリアート、共産主義者の建設―党への組織化として実現せねばならないのであるが、とりわけ、労働組合を〝共産主義の学校〟として組織することに特別の注意をはらわねばならない。それは次のごとき理由からである。●労働者大衆は当面の経済的必要の充足のための、自己の物質的改善のための闘争すなわち経済闘争を通じて、自分達を抑圧している敵は資本家であること、かつ（発展したこの闘争は）資本家個人に対する闘争ではなく資本家階級に対する闘いであること、自分達労働者は団結して闘わなければ直ちに敗北すること、すなわち唯一の武器は団結した力＝組織であること、資本家階級と労働者階級のこの対立、闘争は根本的に非和解なものであり、（階級の死滅に至るまで）闘い続けるしかないこと（→それゆえに、プロレタリアートは全被抑圧人民の闘いの指導的階級となりうるのである！）等々を実際に闘うことによって学ぶのである。我々、共産主義者（党）は労働者大衆のこの最初の階級的団結の形成条件を指導の対象として重視し、徹頭徹尾、階級的団結の強化をおしすすめ、かつ、そこにとどめずに、革命的政治闘争へとこれを突破せしめ、プロレタリアートによるブルジョアジーの権力の打倒、そしてひき続くプロレタリア独裁としての全世界的なブルジョアジーの絶滅戦へと導かねばならない。

そして、そのような蜂起―プロ独―共産主義へ向けて、全ての労働運動を組織する首尾一貫した主体としてプロレタリアートの階級的団結の最高形態たる党の下へプロレタリアートの大衆をうまず、たゆまず組織せねばならない。指導者と階級及び大衆とを完全に一つのものに、切っても切れないものに結びつけたものとしての革命党はプロレタリア社会主義革命勝利の要である。かかる革命党はプロレタリアートの武装蜂起―プロ独を組織する中央集権非合法党として我々の手によって建設されねばならない。かつ、我々は遅れたプロレタリア大衆が広範に存在する経済闘争の戦場において、プロレタリア大衆との結びつきをぜひとも強めねばならないのである。その結びつきは我が党の指導により、党にプロレタリア大衆を結びつける伝導路、蜂起を準備する武装せる革命の伝導路として組織せねばならない。かかる伝導路は蜂起の司令部、プロ独の司令部としての我が非合法細胞により創出され、指導され続けねばならない。党は様々にはりめぐらした伝導路を通じて、革命の成熟期において、文字通りプロレタリアートの軍事的、政治的指導、指揮を貫徹し、蜂起を勝利へ導くものである。これなくしては、武装蜂起を担い、プロレタリアート独裁権力を担い、世界革命を担う「プロレタリアートの革命の軍隊」（―プロ独権力）を建設することはできないのである。

3 日和見主義とたたかい 蜂起にむけた労働運動を

前述したように『左小病』は右翼日和見主義者によって、彼らが自らの経済主義、組合主義を隠蔽するために、革命的プロレタリアートに対する攻撃のために改作、利用されることが多かった。だが、右翼日和見主義者どもの思わくと異なり、レーニンがはっきりと『左小病』の最初に「ボリシェヴィズムは労働運動内部のどのような敵との闘争の中で成長し、つよくなり、きたえられたか？」「第一に、そして主として日和見主義に対する闘争のなかでである」「そして、日和見主義と互いに補いあってきた小ブル的革命性に対する闘争のなかでである」と明確に総括していたように、レーニン主義はその労働運動指導において「メンシェヴィズム」すなわち日和見主義、社会排外主義との闘争を組織し抜くことが大前提であり、また、それらとの根本的分岐を画する闘いを組織しえず、結局敗北するという点で、小ブル急進主義との闘いがあることをも忘れてはならない。

レーニン・ボルシェヴィキの闘いがそうであったように、全ての共産主義者の党は、日和見主義のあらゆる変種との断固たる闘争抜きには蜂起を勝利に導く革命党建設に勝利しえない。そして、あらゆる日和見主義とのきっぱりした分岐、峻別を路線的、組織的に確立しておくことは、蜂起前夜の時代たる今日においては、ブルジョアジーとの最後の決戦に勝利するための決定的要である。

レーニンは蜂起が成功をおさめるための条件として第一に、先進的階級に立脚すること、第二に、人民の革命的高揚に立脚すること、そして、第三に、人民の前衛的隊列の活動性が最も大きくなり、敵の隊列と弱くて中途半端で優柔不断な革命の支持者たちの隊列の動揺が最も強くなるような歴史の転換点に立脚せねばならないとしている。まさしく、蜂起の問題を設定するうえでのこれら三つの条件の点で、マルクス主義はブランキ主義と区別されるのであり、又、このような蜂起の条件が備わった時に、ちゅうちょなくプロレタリアートの部隊を指揮する司令部を準備、確立するという点でレーニン主義は一九二〇年前後のドイツをはじめとする欧州の共産主義者たちの党と異なったのである。一九一八年～二〇年のドイツ革命の敗北はレーニン主義ボルシェヴィキ党建設の敗北として、その根底的原因を有していることは明々白々である。ローザたちのドイツ共産党は「遅すぎた分離」として世に言われているが、レーニンが経済主義、日和見主義との徹底した峻別を党建設の当初から、きわめて極少なグループを率いてさえ貫徹したのに比して、ローザたちの党建設における日和見主義者たちとの闘争の不徹底さは、あらかじめドイツ革命の敗北を準備していたとさえいえるのである。

我々にあっても、革命的プロレタリアートの巨万の隊列を創出するためにこそ、武装蜂起の主体的条件をつくるためにこそ、蜂起―プロ独を組織する中央集権非合法党建設の闘いは現下におけるレーニン・ボルシェヴィキ党建設の闘いとして少しのあいまいさもなく革命的プロレタリアートの闘いの中に真向うから組織せねばならない闘いであり、又、それは最後の決戦の勝利の帰趨を制するものなのである。

（次号につづく）